

ハンガリーを大切にできる子どもに

前在ハンガリー日本国大使館付属 ブダペスト日本人学校 教諭
神戸大学附属小学校 教諭 甘利大紀

キーワード： 総合学習 現地素材 現地理解 異文化理解 批判的思考力

1. はじめに

赴任当初に驚いたのは、ハンガリーに対する子どもたちの思いであった。ほとんどの子どもたちがハンガリーで暮らすことに満足していなかった。遊ぶ場所がないことや言葉がわからないこと、生活が不便なことなど、日本と比較して「ないもの」に目が行き、ハンガリーの国の魅力に目を向けようとしていなかった。

また、「自分の思いや考えをわかりやすく表現しながら、他者と交流する力」については、赴任当時の学校課題であった。つまり「根拠をもって意見を述べたり、根拠とすることの共通点や相違点に着目しながら意見をつなげたりする力」の欠如である。

子どもたちの力を引き出しつつ、同時にハンガリーの魅力に気付くには、現地素材を教材化する実践が必要である。そこで、学習内容として無理のない「生活科」「社会科」「総合学習」を中心に現地素材を教材化する授業実践を合計で6つ行った。本稿ではそのうちの1つを紹介したい。

2. 6年総合学習『文化交流元年～ハンガリー文化の魅力って～』

(1) ねらい

ハンガリーの食（グヤーシュ）、伝統芸能（ダンス）、伝統工芸（染織）について体験的に学習したり、現地の方から話を聞いたりすることを通して、ハンガリー文化そのものの特色を考えることができる。

(2) つけたい力の規定

ハンガリーに赴任して3年目となったH28年度は、1・2年目の研究成果を生かした単元開発を行い、私自身の研究のまとめとした。特に、その際、総合学習のねらいである、「学習の方法に関すること」において、実際にどのような能力を子どもたちの中に育むのかを厳密に規定することで、「根拠をもって意見を述べたり、根拠とすることの共通点や相違点に着目しながら意見をつなげたりする力」を向上させることができると考えた。具体は以下の通りである。

【問題認識】	何が問題になっているのかを見つけ出す力
【方法選択】	問題を解決するための方法を決めて学習の見通しを持つ力
【情報整理】	問題の解決に必要な情報を集めて、整理する力
【根拠】	問題の解決に向けて、経験・データ・証拠・情報をもとにして、意見する力
【論点抽出】	いくつかの意見の中から、議論すべき点を見つけ出す力
【相対化】	意見と意見を比べることによって、立場を変えて見る力
【懐疑】	根拠として使われた経験・データ・証拠・情報の確かさを疑う力
【類推】	根拠をもとにして未来を予測したり、根拠と根拠を関連づけたりして考える力
【結論】	学んだことを引用して自分の判断をくだす力

(3) 指導の工夫

①情報整理：「調べ学習（比較）→体験学習」の流れを取り入れる。

情報は「量」だけでなく「質」にもこだわって集めるようにした。そして、学習のまとめでは、必ず日本文化と比較するようにした。日本文化と比較させたのは、比較によって共通点と相違点を見出させることで、ハンガ

リー文化の特色を浮き彫りにするためである。ここでは、具体例として、伝統工芸（染織）について取り扱った際の授業の様子を記述する。

まず、インターネット・書籍で、日本とハンガリーの染織工芸の概要について調べさせた。だが、インターネットという多種多様、膨大な情報からふさわしい資料を選択させるには時間がかかる。そこで、あらかじめ調べやすいインターネットサイトと本をこちらで用意し、資料として提示した。さらに「染織で使用する材料」「染織の工程」と、日本とハンガリーの両者に共通する観点を設け、その観点にあてはめるように情報収集をさせた。これにより、子どもたちは資料の中から適切な情報を選んだり、選んだ情報と情報を関連付けたりすることで、染織の材料や工程について理解を進めることができた。

さらに、共通する観点で比較させたことにより、情報と情報の共通点や相違点もはっきりさせることができた。ここでは、どちらの国も染色の材料には自然のものを利用していることがわかった。また、相違点としては、ハンガリーの染織は鉱物も利用しているが、日本の染織は植物のみを利用しているということが明らかとなった。事前に調べ学習をしたことの効果は他にもあった。調べ学習によって「もうわかったこと」と「まだわかっていないこと」がはっきりしたということである。調べてもわからなかったことについては、講師の先生への質問事項としてまとめ、インタビューの時間に質問させていただくこととした。事前に調べ学習をすることが、体験学習の目的意識も生んだ。



skanzen での染色体験

染色は、Skanzen という校外の町まで出かけ、体験をさせていただいた。調べていた通り、ハンガリーの染織は自然のものを利用していた。ただし、使用されている植物や鉱物の名前、そして実際に色を抽出する過程については知らないことばかりであった。特に、見た目は茶色をしている木の枝が、赤色の染料に変わったり、どうみても黒色の木の実が青の染料に変わったりすることは、子どもたちにとっては大きな感動であった。さらに、赤色の染料も着色時には紫がかかることや、どの色も淡い着色加減となることも体験してみて初めてわかったことだった。

体験学習後に、まとめを行った。ハンガリーの染織の特徴は？という問いに対して、子どもたちのまとめは、「自然を生かし、大切にしている」というものだった。これは、染織の材料となっているものが、自然界の中に複数あり、ありとあらゆるものを利用しながら自分たちの生活に彩を加えていることが根拠となっている。また、その制作工程のどこをとっても、環境に良いことから、自然との上手な付き合い方を子どもたちは感じる事ができた。

インターネットを利用することで、1つの場所から、複数の情報を幅広く集めることができる。これはインターネットの大きな利点である。一方で、体験学習をすることによって、調べたことを体験的に確認したり、インターネットには絶対に書かれていない「自分の感じ方」をもとに情報を集めたりすることができる。これが、量に加えて質にもこだわった情報整理である。

②相対化：地元大学の学生との複数回の交流

「文化」という抽象概念を扱う以上、自分たちの主張の客観性が担保されにくい。そこで、地元ブダペストにあるカーロリ大学の日本語学科の学生と全5回（ふた月に1回ペース）にわたる交流を実施した。

- ① 出会いの会「仲良くなる会」
- ② 「伝統工芸」について語る会
- ③ 「食文化」について語る会
- ④ 「伝統芸能」について語る会
- ⑤ 学習発表会

交流では、以下の手順を踏んだ。

ただ交流を行うのではなく、毎回テーマを持たせた。テーマはもちろん、本単元の学習内容とかかわることをテーマとしている。

どの交流においても、まず自分たちで調べ、まとめている。その上で、

自分たちの学習の「たしかさ」を確かめる場として位置づけた。

自分たちの考えに地元学生の考え方が入ることで、客観性が担保されると同時に、考えにも深まりが生まれた。ここでは、具体例として、食文化について取り扱った際の授業の様子を記述する。以下、授業の実際である。

情報整理で述べたように、調べ学習をした後、体験学習をし、食文化についてまとめるという過程を経た。食文化でも同様に、複数のサイトをこちらで提示し、ハンガリーにはどのような料理があって、なんの材料が使われているのかを調べた。また、代表的な料理「グヤーシュ」は、実際に作って食べた。材料であるジャガイモと、パプリカは学校菜園で自分たちの手で栽培し、グヤーシュの材料とした。グヤーシュ作りはうまくいき、大変おいしいものができあがった。みんなで集まり外で食べるという伝統的な食べ方もそのまま再現した。



カーロリ大学との交流

栽培する過程から実際に行ったことで、料理になるまでの過程にも大変さがあったり、みんなで力を合わせてつくことで、料理を通じて互いの関係を深めたりすることにもつながることを子どもたちは感じたようだった。

そこで、カーロリ大学の学生の方にも、自分たちの感じたことをそのまま伝えるようにした。

ハンガリーの料理は、みんなハンガリー由来の材料で作られていることや、食材にはふんだんに野菜が使われていて健康的であること、さらには、1つの鍋をみんなで囲んで食べるという風習が人と人

とのつながりを育んでいること、これらが子どもたちから学生に伝えたことである。

学生からは、これらに関連してさらにユニークな話が聞けた。グヤーシュ以外にも、ハンガリーには鍋料理がたくさんあり、どれも家族だけでなく、近所の人まで交えてみんなで食べるものであること。牛肉よりは豚肉の方が好きで、お祭りに使われるお肉は豚肉ばかりであるということ。家族で食事をとることが何よりも大切にされていて、お父さんは食事の時間には必ず家に帰ってくることなどを教えていただいた。

ハンガリーという日本にはあまりなじみのない国である場合、インターネットをつかった調べ学習では、資料に限界がある。体験的な学習は、量をこなすことができない。そこで、こうした現地の方との交流の機会を適宜取り入れることで、不足している情報を効果的に補いながら、実感をともなった理解を生むことができた。そしてもっとも重要なのは、現地の方の考え方に触れるということである。日本人という視点から見ているハンガリー文化を、ハンガリー人という視点から見直した時に、その魅力はより確かなものとなって子どもたちの目にうつる。

③結論：学習発表会を実施する。

学習のまとめとして学習発表会を計画した。これは、カーロリ大学の学生の方に向けた学習の発表としている。学習発表会を設定した理由は、単元末の表現活動があらかじめ見えていることで、子どもの追究意欲が向上すると考えたからである。また、報告対象が現地の方であることにより、自分たちの考えの「確かさ」をたしかめたいという意欲につながり、追究対象を深く見つめようとする態度が育まれると考えた。

事実、子どもたちは、総合の学習時間以外でもハンガリー文化についてしきりに調べてきた。本年度は週末の課題として、調べ学習を実施したが、みな言わずともハンガリーの特産品や、その特徴、歴史などを調べてきた。子どもたちが調べてきた自主学習は資料として、ファイリングを行い、学級文庫と同じところに掲示した。そして、もっとも重要なのは、これまでの情報を総合して自分の考えをまとめる、という過程を経験できるということである。年間を通して行ってきたハンガリー文化の学習資料は、各自ファイル1冊分、ノート1冊分となった。

発表内容は、ハンガリーの食文化、伝統工芸、伝統芸能についてそれぞれ自分たちが体験的に学習したことをもとに発表した。それぞれの項目についてまとめる際に、インターネットで調べた資料を見直したり、体験学習を実施した際のふりかえりを見直したり、カーロリ大学の学生にインタビューした内容を見直したりしていた。

そして、それらの情報を総合しながら、各項目をまとめていった。また、まとめ方にも一工夫をいれた。まとめ方は、全部で3種類。パンフレットと模造紙、さらにパワーポイントでまとめるという、3つの方法を取り入れた。パンフレットは学習発表会の資料として全活動と、その学びについてまとめた。模造紙は、掲示用として、この1年間の内「いつ、どのような学習を、どのような順番で実施したか」についてまとめた。最後に、パワーポイントは「それぞれの学習を通して、何を学んだのか」をまとめた。

3つのまとめ方に分けて、まとめる内容をそれぞれに変えたことで、観点がしぼられ、子どもたちのまとめもスムーズに進んだ。また、同一の発表会を持ちながらも、発表内容が変わることで、それぞれのチームの発表を楽しみにする子どもたちの姿も見ることができた。

情報を総合し、学びをまとめるということを経験させる上で、最後に表現活動を設定することの意義は言わずもなであるが、それに加えてさらに、発表の対象や、発表方法、まとめ方などを工夫することで、子どもたちの意欲とまとめる力はすみやかに向上する。

④成果のまとめ

- ・総合学習においては、つけたい力を厳密に規定することで、すべき活動がはっきり見える。
- ・比べて考えることにより特色が浮き彫りになる。
※日本文化とハンガリー文化の比較により、ハンガリーの特色がはっきりとした。
- ・用いる情報は、事前に精選しておく、子どもたちが必要な情報を効果的に集めることができる。
- ・観点を示した上で情報を集めさせると、情報収集がスムーズになる。
- ・高学年においても、体験活動を取り入れることで、学習の意欲が高まる。
- ・体験活動では、「自らの経験」や「現地の人々の考え方」など、調べられない情報が手に入る。
- ・インターネットと体験活動を合わせて取り入れることで、質の異なる複数の資料が集まる。
- ・現地の方に自分たちの考えを伝え、意見を聞くことで、客観性が担保される。
- ・現地の方との交流は複数回持つことで、「現地への興味」から「現地との絆」に変わる。
- ・単元末の活動を設定することで、これまでの学びが総合される。考えの再構築が起こる。
- ・発表方法も複数取り入れることで、それぞれにまとめる内容が絞られ、発表も焦点化する。

3. おわりに

特に学習方法に関する目標が定められている総合学習をしっかりと行うことにより、子どもたちの課題改善につながる取り組みができたと感じている。そして、何よりも現地素材の教材化は、子どもたちのハンガリーへの愛情を深めるのに効果的であった。余談ではあるが、年間5回の交流を行ったため、子どもたちは、学生の方の名前をみな覚え、交流中は、「ペーテルさん」「ユリアンナさん」「ニキさん」と、気軽に名前を読んで交流していた。中には大変ユニークな学生もいて、その学生は常に子どもたちの人気者であった。学生が帰る時間になると、名残惜しそうに玄関まで送り、手を握りながら最後まで話していた姿が印象的であった。現地について、「考える」とか「理解する」とか、いずれも大切なことだとは思ふ。しかし、現地を「好き」になることにまさる「現地理解」はないのではないだろうか。私も現地素材を教材化するにあたって、多くの現地人にお世話になった。開発を通して土地と人へのかけがえのないつながりが生まれた3年間であった。